

一 一 月 例 会 発 表 要 旨

特集

戦争テクノロジーと文学

【特集の趣旨】

運営委員会

近代の幕開け以来、自然科学の方法論は
各々の時代の言説空間を常に刺激してきた。
同時に、その実践的応用として生み出された
様々な技術は、産業の発達を促し、人々の生
活の質を飛躍的に向上させることとなった。
しかし、種々の公害問題や原子力エネルギー
の使用によって生じた惨禍と環境汚染などの
例にみられる通り、科学技術は社会問題の原
因となることもある。科学技術は、来るべき
理想の社会を実現する方法として、人々の想
像力を刺激し限らない夢を抱かせるものであ
る一方、それらを生み出した人間自身を危機

的な状況に追いやりかねない恐るべきもので
もあるという両義性を持っている。特に、技
術の進歩は、「人間」という概念そのものを
組み替えてしまう可能性をも齎すのである。
こうした科学技術の問題系に直面したと

き、まさに「人間」のありようを描くことを
試みる表現営為でもあった近代文学は、どの
ような想像力の枠組みを私たちに提供しよう
としてきたのだろうか。狭義のSFという
ジャンルに限らずとも、文学と科学技術を横
断する「知」の接触面を模索する試みは、先
鋭的な態度を持った文学者たちを充分に魅了
するものであったはずだ。

本特集では、このような問題意識が最も切
迫しつつ現われていた時代として、昭和初期
から戦時下、さらには戦後にいたるまでの文
学者たちの動向に焦点を当ててみたい。人々

を戦争へと総動員していく体制が整えられ、
各種軍事産業の活発化という形で、科学技術
への関心が高まりつつあるさなか、技術に駆
り立てられていく「人間」を当時の文学者は
どのように描き出したのか。「人間」が技術
によって戦争へと適合化されていく事態は、
かねてより仮想戦記や科学小説などに描かれ
てきたといえるが、そのような固有のジャン
ル領域に拘らず、戦争とテクノロジーの關係
を問題化した作品を幅広く検討することを通
じて、文学が捉えた科学技術の相貌を改めて
見出したいと考えている。こうした考察は、
今日の科学的知性に対する私たちの想像力の
射程を照らし返すことにもなるだろう。

このような視点に立ち、本特集では、文学
から見た科学と同時に、科学の側から見た文
学（芸術）の可能性／不可能性をも検討して
いきたい。文学を科学技術と連関的に考察す
る本特集の討議を通じて、これら二つの領域
を横断する戦間期の総合的な言説空間のあり
ようを再定位することを目指したい。

海野十三作品における変容する戦争テクノロジーと人間存在

中 尾 麻伊香

本発表では、科学小説というジャンルを開拓した作家として知られる海野十三（一八九七—一九四九）が描いた作品を通じて、戦争テクノロジーが人間という存在をどのように変容させるかを検討したい。もともと電気技術者であった海野は、一九二七年に発表した作品を皮切りに小説家へと転向し、ちょうど日本が軍国主義に傾き、戦争へと駆り立てられていく時代、人気作家となっていた。その間、海野は戦争テクノロジーをどのように捉え、描いたのだろうか。

科学・技術の正負両面を認識していた海野は、優れた科学技術を有する国が世界を支配する科学時代の到来を早くから予測し、小説を通して科学・技術の重要性を子どもたちに伝えていた。海野は日本の科学・技術が西洋諸国に遅れをとっていることを知っており、その認識を作品においても反映させていた。

戦時中には多くの軍事科学小説を描き、さまざまな超兵器を描写していくが、海野の作品においてはその超兵器は敵国によって製造されるものであった。同時に海野は愛国者であった。科学技術力で圧倒的に負けていると知りながら、それでも日本が勝利するストーリーを描かなければならないという状況で、しだいに海野の作品では日本人の精神力が強調され、奇想天外なアイデアを用いた兵器や原始的な兵器によって日本が勝利するというストーリーが描かれるようになる。科学・技術の重要性を説いていた海野の作品では徐々に、精神力の重要性が説かれるようになる。そこではまた、自爆攻撃が奨励されるようになる。

海野の作品は、同時代の欲望をある意味科学的に表出している場と捉えることができ、国家の目的を最優先課題にしたとき、その手段となるテクノロジーと人間の主客転倒が自明のように生じる。個人よりも国家が重視される全体主義へと向かっていく時代、戦争テクノロジーと人間存在がどのように編み直されていくか、海野の作品を通して考えていきたい。

空想と科学

——中野重治「空想家とシナリオ」とその射程

宮 澤 隆 義

空想と科学というテーマは、二〇世紀を通じてエンゲルスの著作「空想から科学へ」と切り離せない関係にあった。中野重治「空想家とシナリオ」（『文芸』、一九三九年八月—一月）はいわゆる「転向五部作」の近辺に位置付けられてきた中編小説であるが、これを「空想から科学へ」における「空想的社会主義」から「科学的社会主義」に向かうとする主張との関連に置き直してみると、どのようなことが見て取れるだろうか。

堺利彦が日本語に訳した改造文庫版のエンゲルス『社会主義の発展——空想的から科学的へ』を中野は読んでおり、「空想」というモチーフを彼が取り上げた際に、「空想的から科学的へ」という含意が全くなかったとすることは考えにくい。だが、エンゲルスにおいては「空想から科学へ」という発展的な順

序で議論が構成されていたのに対し、中野はここでむしろ「空想」を集中的に描き出している。言うまでもなくこれは、当時の弾圧の結果として彼がやむを得ず強いられていた地点であったことは間違いない。だが、今日のグロバリゼーションがあらゆる人々を絶えず資本主義への「転向」へと巻き込み続けている状況に対し、この中野の試みが投げかける事柄から、何がしかの示唆を汲み取ることができないだろうか。

また、既にいくつかの先行論で指摘されてきたように、本についての百科全書的な「空想」描写が展開される「空想家とシナリオ」には、書物を生み出す生産・消費関係の総合的な連関が描き出されている。本発表ではこのモチーフを、一九三〇年代に唯物論研究会を中心に展開されていた技術論と重ね合わせてみることで、小説内の「空想」がそこでの技術に対する規定とどのように関連するののかについても考察してみたい。そこから改めて総力戦体制の問題と、それが残したものについて論じられればと考えている。

戦争テクノロジーと日本SF文学の誕生の關係

澤田 由紀子

ベストセラー小説『日本沈没』によって日本のSF文学を一気にメジャーにした小松左京が、「戦争がなければSF作家にはなっていない」と発言していたことはよく知られている。戦時下で少年期・青年期を過ごし、敗戦後に日本のSF文学ジャンルを立ち上げていった作家の科学技術に対する考え方が、戦争と科学技術の關係にどう影響されているかを見てゆく。

例えば、大学生として農芸化学を学んでいた星新一は、徴兵猶予で戦争には応募されなかったが、圧倒的な科学技術の差と、軍部とのつながりが強い星製菓社長の父や政財界の子息である学友から一般人では入手できない情報を得て戦争の勝利はあり得ないと考えていた。終戦直後には後継者として携わっていた会社の仕事の一環において、GHQの情報統制により公開されていなかった「原子爆弾」

の被害を知ることとなる。一方、日中戦争の開始とともに国民学校に入学した小松左京は、雑誌「少年倶楽部」や「新青年」、その他戦時下の科学小説を読んでいた。特に「少国民新聞」に連載された北村小松の冒険小説「火—少年科学防諜作戦」は、その中に登場した「新型爆弾」とヒロシマ・ナガサキに使用された「原子爆弾」の類似によって強い衝撃をもたらした。敗戦後、学生時代に漫画家を目指して「原子爆弾」を取り上げた作品を描き、その後、経済雑誌「アトム」編集部に入社して原子力開発への知識を深めて行くことになる。

星新一と小松左京、その戦中・戦後の動向から、当時の世相としての、戦時下における科学技術の劣勢からの諦念と、戦後復興期における科学技術への過度な希望を読み取って行きたい。特に、敗戦後の「原子爆弾」表象と、原子力の平和利用についての発言に着目しながら、戦中から戦後のテクノロジーに対する日本SF文学の黎明期を作り上げてきた作家達の考え方を浮き上がらせられればと考えている。そして、彼らが戦後に誕生した日本のSF文学というジャンルにどのような希望を見いだしていったのかを考察したい。